

## インタビュー Interview

霜田 亮祐

Ryosuke SHIMODA

×

仲田 茂司

Shigeji NAKADA

×

NPO 法人 馬事振興会

NPO Life With Horse

×

中田地域の皆様

People Lifeing in

Nakada

2019年6月1日の夜、中田区である仲田氏の実家で行った炉端焼きをつまみながら、中田トレイルのについての会話の記録である。

It is a record of the conversation about the Nakada Trail while a fireside burning in Mr.Nakada's house on the night of June 1, 2019.

仲田茂司さん：

トレイルに関して、忌憚のない意見をお聞かせいただきたいと思います。けして難しく考えずに、第一回人馬ウォークラリーの感想とこれからの期待みたいなものを話していただきたいなと思います。

霜田亮祐さん：

なんでも。なんでもどうぞ。

仲田昌勝さん：

何も無いところに新しい灯をともしにくれたってところに非常に感謝しています。いいことなので続けていってほしいということが、まずひとつ。

あと参加して分かったのが、馬にまず水をあげますよね。でも「馬って、飲めって言っても飲まないんだよ」というお年寄りの方がいたの。

一同：

へえ。

仲田昌勝さん：

「馬は自分の飲みたいときに飲むんだよ」ってね。「これから仕事をするっていう時には飲まない。仕事をした後に飲みたくなったら馬が飲むんだよ」って。そういう経験をしたお年寄りはいっぱいいるけど、我々はそれを知らない。

一同：

人間みただね。仕事してから飲むの。

わはは！

仲田昌勝さん：

そういう新しい発見があって、お年寄りもすごく興味を持ってる。なのでぜひ、頑張ってる人と馬の共存を続けていただきたい。いやあいい話しちゃったな。

一同：

わはは。(拍手)

三森孝浩さん：

去年から参加させていただいたんですけど、すごく興味深い話ですね。馬と人ってもっと身近だったはずなのに、実は私たちが生まれたころには離れていて、物語みたいになっちゃって。それは事実として、また人と馬が触れ合える機会を企画していただいたのがすごくありがたいなあと。馬と人は身近だったことを再認識させていただきました。

一同：

(拍手)

三森みな子さん：

私たちは去年コピアとしてカレーをつくる担当だったので一緒に歩くことはできなかったんですけど、私たちも時間が空いた時に妖精の森を見せていただきました。あと地元でありながら、馬が運動してた養駟運動場というところがあったのは30年間知りませんでした。改めて中田の良さを、みんな集まって、ほんとに物語みたいになっちゃって。これからも続けてやっていただきたいと思っています。よろしく願いいたします。

一同：

(拍手)

仲田久子さん：

わたしも三森さんと同じ考えです。あとは塩の道。馬に荷物を載せて歩く道ですね。私は、言っちゃ悪いけど(笑)、短足の馬ってというのは見たことなかったんですね。初めて馬と会ったときは「えーっ！」って思ったくらい(笑)。

一同：

わはは！

短足って言っちゃ悪いですよ(笑)

安定感ですよ安定感！

仲田久子さん：

そうですね(笑)。あのような馬が昔は荷を積んで歩いてたっていうのが、今わかってるんですよ。

鈴木清彦さん：

そうですね。サラブレッドとかテレビで見る馬は、人間が作り上げた美というか、スピードとか姿かたちを求めたものです。仕事で一緒に使った馬ってというのは実用性に優れて、足が太くて丈夫な馬です。石のところも歩ける、荷物も引っ張れる。見てくれは悪くても、実用性に優れた馬が名馬と呼ばれていたんですね。

一同：

おお。(拍手)

仲田久子さん：

そういう中田の歴史を教えていただいてよかったなと。あと、二本ぶなにはね、



登場人物：左後ろから、芳賀喜貴さん、鈴木清彦さん、霜田亮祐さん、三森孝浩さん、三森みな子さん、仲田久子さん、マリアさん、仲田佐和子さん、仲田茂司さん、左下から、大澤達也さん、許韜さん、（撮影：田木日奈子さん）

ニコウキスゲが群生していたんですけど、仲田正子さんがその種を取って育ててくださったんです。それを9月ごろ二本ぶなのところに植えたっていうことで。そうしたら馬が通る道と一緒にあって、素敵ですよ。仲田種苗園があるからそういうことが可能なんだなと思って、感謝しています。

一同：  
（拍手）

**仲田佐和子さん：**

お世話になってます。今おっしゃったように、馬のプロポーショナルって本来こうなんだっていう。やっぱり去年びっくりしました。ほんとにたくさんの方が参加してくださって、感謝しております。ありがとうございます。

一同：  
（拍手）

**マリアさん：**

馬は初めて見たわけではなかったんですが、一緒に歩くとテンポが合わないとか、発見がありました。あとは歩きながら様々な植物を紹介していただいて、本当に多様な植物や生き物がいて楽しめました。ありがとうございます。

一同：  
（拍手）

**芳賀喜貴さん：**

去年はウォークラリーの予行練習に参加させていただきました。やっぱり馬に人に合わせてもらうんじゃなくて、人が馬に合わせるっていうのが自然であるのかなど。それで、山の中を歩きながら自然を満喫して、人も馬も歩いていくっていうのはとても新鮮だっていうふうに感じました。古殿町は隣町なんですけど、馬を通して親睦を深められたら、お互いいいのかなっていうふうに思いました。これからもよろしく願いいたします。

一同：  
（拍手）

**鈴木清彦さん：**

私どもは馬の目線から参加させていただいています。いつも思うのは、こういう機会を与えていただいて本当にありがたいということです。馬文化については、やまがらを切り出したり農耕に使ったりといった、使役馬としてというのが一番多いんですが、現代では機械化で馬がいらなくなって、趣味とか競馬とかが身近になっています。

私たちが馬と一緒にいるにあたって考えていかなきゃならないのは、私もおじいちゃんから言われてきたんですが、「馬のお力添えを得て仕事させていただける感謝の気持ちを常に忘れるな」といことです。馬が嫌がることをさせようとしても言うことは聞かない。そういう折り合いをつけながら、1トン背負える馬であっても、馬の調子を見て700キロの荷物をつけるとか、そういうことを人は見抜いていかないといけない。そういうことを頭に入れていくと、ウォークラリーと一緒に歩くと行って、馬がだいぶ速かったりするわけですね。

ダイエットでも自分のペースで歩けばあんまりカロリー消費につながらなかったりっていうのがありますよね。馬に合わせて仕事をしていたっていう歴史と合わせて、馬のペースで歩いているのはちょっといいんじゃないかなって思いますね。

馬事振興会として馬の文化を広めてきて、私たちもどうしてもお祭りだとか町内のことしか見てなかったんですけど、石川町のお年寄りたちとも話させてもらったなかで、石川町も馬に関して同じような

文化を持っているということが改めて分かってきました。ほんとに、ボーダーはないんだなっていうのが分かった一日でした。今後もこういう協力を続けて、なんとかうまくやっていきたいなと思っております。よろしくをお願いします。

一同：  
(拍手)

**大澤達也さん：**

まだウォークラリーは体験してないんですけど、今日一日色々見させていただいて、自分は東京出身なんですが、やっぱり福島には可能性があるなっていうのはすごく思いました。今日行ったのは桜谷トレイルといって、川べりに桜の連なりがある場所なんですけど、山の中にもやっぱり桜の連なりが続いていて、全部が繋がっていることに気づきました。昔ながらの地形や植物をうまく使って作られているところが見れて感動しました。風景も、今日は福島の植生が見えるところに行かせてもらったんですけど、やっぱり山の連なりと植物の見え目の違いがあって、そのきれいな風景の活かし方について可能性を感じました。自分は今岩瀬農高校にいて、高校生も巻き込みながらやりたいなというふうに思っているんで、石川町だけでなく、鏡石岩とか須賀川市とか、いろんな大きなつながりでできればいいなと。自分自身も

今桜のことで色々実験的にやってるので、ちょっと噛ませてもらえればなと思います。

あと今いろんな食べ物を食べさせてもらって、やっぱり東京出身の自分としては食べ物も重要で、そのへんも最高だなっていう…。食べ物と風景ってやっぱり大事だと思うので。最高の一日でした。ありがとうございます。

一同：  
(拍手)

**仲田茂司さん：**

わたしは昨年、自分が生まれたところを何とかしたいなと思って、突き動かされるようにウォークラリーを企画したんですけども、今年2回目になると皆さんに負担をかけているところもあるのかなと思って…。馬事振興会さんにもコピアさんにも苦勞させているので、すごく悩んだんですけども、皆さんに温かい言葉をいただいて、背中を押されて今回開催に至りました。

このイベントはすごく外部評価が高くて、明日は衆議院議員の玄葉さんも上杉さんも途中からでも参加したいそうで、すごく評価していただきます。熱い手紙もいただいて、東京の一極集中を打破するためには、我々が皆さんと一緒にやるように、まずは里山の評価だっていることを言っていたいただいています。すご

くありがたいと思います。

そういったことも皆さんのおかげなので、今後ともよろしく願いいたします。ありがとうございます。

**霜田亮祐さん：**

皆さんありがとうございました。本当にこうして皆さんに集まっていたいてよかったなあと。

私が馬に注目したきっかけは、今千葉大学がある松戸が、もともと馬がいっぱいいた場所だと知ったことです。今は大学のキャンパスの土地なんですけど、そこが小金牧という江戸幕府直営の管轄の牧場で、多くの馬が走り回っていたんです。そこから眺める富士山の風景なんかも、歌川広重の富嶽三十六景の一つになっていて、すごく感動的な場所なんです。あとは今している手ぬぐいですが、これどこのかっていうと、岩手県の遠野のなんです。

**鈴木清彦さん：**

ああ。

**霜田亮祐さん：**

遠野の荒川高原牧場の近くにある、荒川駒形神社にまつられている馬がいたころの絵をモチーフに作られた手ぬぐいなんです。この手ぬぐいがつくられたのは、岩手県の遠野でやっているクイーンズメドウカントリーハウスっていうのがあって、私がすごく尊敬しているランドスケ





ーブデザイナーの田瀬理夫さんっていう方が20年くらい前に始めたプロジェクトです。現代的に馬と人が共存する環境っていうのを再生できないかというのを目標にね。そういうプロジェクトがあるっていうのは知っていたんですけど、震災のときに第一原発の事故があって、福島が大変な状況になって。人口もどんどん減っていくし。そういう状況の中でこう、再生の糸口がないのかなあと。そういうときに、田瀬さんが見せてくれたのが、古い高校の地理の教科書で、そこに東北の馬産の分布を示す地図が載っていたんです。で、遠野は遠野で馬産として有名だったんですけど、福島のほうもよく見るとかなり多くの馬産が盛んな地域があってですね、これはすごいなと。もちろんこの石川町の地域も入ってます。これを生かした地域再生の方法がないのかなと。それを模索していた時に、あの養駟運動場は本当に素晴らしい馬産遺構なんですね。国の重要文化財にも指定してほしいくらい。あんな環境は他にないくらい感動的。あそこをいま、町議会議員の瀬谷寿一さんから紹介いただいて、ここは素晴らしいと思って、そこでワークショップを始めました。今年で5年目になる千葉大の学生を連れてやっているワークショップで、2年前から対象地として。仲田さんとやり始めてですね。

実際その後馬事振興会さんと「やるぞ！」っていうふうウォークラリーに向けて動き始めて。いやあすごいなと、そんな感想を持っています。私自身の個人的な目標としては、人口がどんどん減っていくのは全国共通の現象なんですけど、人口が減る分、空いた土地が増えていくわけですよ。そういう場所っていうのは、すごくネガティブに捉えられがちなんですけども、例えば馬を一頭そこに放すとすれば、馬ってそういう場所でのびのびと生きていられると思うんですよ。だから人口が減っても馬がいる、いつも馬がそこにいるっていう状況をつくる事ができれば、福島の再生っていうのも、具体的なイメージを持ちやすいのかなと、個人的には思っています。そういうのって話だけではなかなか進まなくて、実際に何かアクションを起こさなくてはいけない。そこでまさに、皆さんのご協力を得て、ウォークラリーができるっていうのは素晴らしいと感動しています。引き続き今後も、こういう活動を続けていければいいかなあとというふうに思います。馬っていうのは、まあ千葉大学ってすごく留学生が多いんですけど、馬っていうのは共通言語になります。馬と人の歴史ってすごく5000年くらいあるんですけど、犬と同じくらいですかね。

一同：

へえ。

**霜田亮祐さん：**

馬と人というのは近い関係にあって、単なる使役動物ではないと思うんですね。パートナーとしての関係を築けるのではないかと思うし、人と馬が共存している環境っていうのはいわば、我々の文化的な景観として評価されるものでもあるし、そういう状況を石川町並びに周辺にも展開してですね、この地域を盛り上げていきたいなあと思っています。ある意味、私はライフワークとして関わっていかうとは思っているんで、引き続きよろしく願いいたします。ありがとうございます。

一同：

(拍手)

**仲田茂司さん：**

ではこれで中締めにしますか。

**霜田亮祐さん：**

記念写真撮りましょう。

終わり

2019年6月1日



※1

つづく ...  
to be continued...



## 写真クレジット

### Photo Credits

- ※ 1：徐 躍曄 Yueye XU
- ※ 2：許 韜 Tao XU
- ※ 3：Niels Niemeyer
- ※ 4：田木 日奈子 Hinako TAGI

上記以外（出典記入）なしの写真、  
図版はすべて霜田亮祐と仲田茂司  
Other than the above (with source)  
photo or illustrations are all  
Ryosuke SHIMODA and Shigeji NAKADA

(助成) 公益財団 福島県区画整理協会

## 発行人

### Issuer

ふくしま若者会  
Fukushima Youth Association  
千葉大学大学院園芸学研究科  
Chiba University Graduate School of Horticulture

## 編集者

### Editor

霜田亮祐 Ryosuke SHIMODA  
仲田茂司 Shigeji NAKADA  
許 韜 Tao XU  
田木 日奈子 Hinako TAGI  
マリア エルミロヴァ Mariia Ermilova

## 協力・協賛

### Cooperation and support

石川町  
中田造林組合  
NPO 法人 馬事振興会  
NPO 法人 ふくしま風景塾 2017  
(一社) ひとくらす  
(一社) いわき石川青年会議所  
福島民報社  
福島民友新聞社  
町民ニュース  
有限会社夕刊いしかわ新聞社  
有限会社 v  
株式会社 福産建設  
水谷工業株式会社

